

二〇二三年度 卒業論文

『安楽集』における「聖道」・「往生浄土」の比較

—道綽の自力観を中心に—

コピー 禁

L200122

前住 淳慈

目次

序論	1
本論	2
第一章 『十地経論』、『往生論註』にみられる「聖道」と「往生浄土」	2
第一節 『十地経論』にみられる「聖道」	2
第二節 『往生論註』にみられる「往生浄土」	5
第二章 道綽の「聖道」と「往生浄土」	7
第一節 「聖道」の定義	7
第二節 「往生浄土」の定義	11
第三章 「自力」と「他力」	13
第一節 曇鸞の「自力」と「他力」	13
第二節 道綽の「自力」と「他力」	16
第一項 『安楽集』における「自力」と「他力」	16
第二項 自力自摂と他力他摂	19
結論	25
註	

コピー禁止

参考文献

コピー厳禁

序論

道綽（五六二―六四五）は主著『安樂集』にて、仏果を得るための道として聖道と往生浄土の二つの法門があることを明かし、末法の時代においては往生浄土の法門のみがさとりを得ることができるとする。日本では、浄土宗の開祖であり真宗七祖の第七祖法然が『選択本願念仏集』冒頭に聖浄二門として、『安樂集』の該当する箇所を引用している。

糸原恒久氏は、「聖道」・「往生浄土」のそれぞれの語の出典のある書物について論じている。「聖道」の語は『十地経論』にみられ、「往生浄土」は『往生論註』（以下『論註』と略す）にみられると指摘する。⁽¹⁾さらに、両書の時点では両者の対比は、直ちに判目として出されたものではなく、『涅槃経』を講究していた道綽の実体験や『大集経』に説かれる三学の滅尽を受けた思想的必然性が影響し、初めて判目として成立したと指摘するのである。⁽²⁾

本論文では、『選択本願念仏集』によって、より鮮明となった『安樂集』の「聖道」・「往生浄土」の二門について、直ちに判目として出されたのではないとされる両者を、道綽が判目として提示した意図を考察する。この考察にあたり、道綽の自力観や他力観が重要な問題となるのではないかと推測する。なかでも、道綽の自力観についての研究は近年注目されており、易行道における自力から他力への連続性などが指摘されている。⁽³⁾これらの指摘から、「聖道」の提示は、唯一得証の可能性を持つ「往生浄土」の法門を際立たせるためになされたものであると推測する。この推測を確かなものとするため、まず「聖道」・「往生浄土」の語が出された文献を確認する。

次に、道綽の示す「聖道」と「往生浄土」の二門はどのようなものであるのかについて調査する。そして、道綽の自力・他力観に焦点をあて、二門における自力・他力の関係について考察し、これを補うため曇鸞の自力・他力観についても考察する。道綽が自力をどのように捉えていたのかを、重点的に考察することによって、聖浄二門への理解が一層深まり、二門を提示した道綽の意図を考察する上のでがかりになると考える。

本論

第一章 『十地経論』、『往生論註』にみられる「聖道」と「往生浄土」

第一節 『十地経論』にみられる「聖道」

まず、糸原氏が指摘する「聖道」の語が出される『十地経論』および「往生浄土」の語が出される『論註』をみていくこととする。

「聖道」の典拠については、『十地経論』にあるとする、糸原氏の指摘がある一方で、木村宣彰氏は『涅槃経』にあると論じている。(4)『涅槃経』には、「仏性亦爾一切衆生雖復有之。要須修習無漏聖道然後得見。」(『大正蔵』一二、五五五頁)とあり、これを木村氏は、「一切衆生にまた之(仏性)有りと雖も、必ず無漏の聖道を修習するを須いて、然して後に見るを得るなり」(5)と訓読しており、(6)傍線部に聖道の語が確認できる。

『安樂集』第十大門には、

ただ一切衆生すでに仏性あるをもつて人人みな成仏を願ふ心あり。しかれども所修の行業いまだ一万劫に満たざるよりこのかたは、なほいまだ火界を出でざるによりて、輪廻を免れず。このゆゑに聖者この長苦を慰れみて西に回向するを勧むるは、大益を成ぜしめんがためなり。（『註釈版七祖篇』二八五頁）

とある。木村氏は、ここで示される仏性という語に注目し、第十大門と『涅槃經』の文意を比較して、傍線部の「所修の行業」を「聖道」と見ているのである。たしかに、『涅槃經』には明確に、「聖道」の語が述べられていることが確認できる。元来『涅槃經』を講究していた道綽にとって、同經は仏道修行の根底にあると考えられるため、『涅槃經』から「聖道」の語を抽出したと考えるのは、自然な流れであるといえる。

この後に詳しく論じるが、一方の『十地經論』には「微けき」という語が使用されていることを確認でき、「聖の道」を「微けきもの」としている。この「微けき」の語は、「理深解微」と関連しているようにも思える。このことから、「聖道」の典拠は、『十地經論』と『涅槃經』にあると考えられる。

『十地經論』は、『十地經』の註釈書であり、世親の撰述である。曇鸞の『論註』と、その註釈対象である『淨土論』の著者でもある、世親の『十地經論』から、それぞれの語を抽出した事実は興味深く、関連性が考えられる。さらに、曇鸞が註釈した『淨土論』は、菩提流支の訳出であり、『十地經論』の訳出についても、菩提流支であると考えられている。このことは、『淨土論』と『十地經論』との間で、菩提流支訳という共通点を見出すことができ、関連性を調査する上で一考すべき要素となり得る。

桑原氏の指摘によると「聖道」の語は、『十地経論』卷二「初地歡喜地品」にみることができ。

偈に、「微けき、知り難き聖の道は、分別非ず、念を離れ」と言うなり。此の偈は何の義に依りてか説く。「といわば、」智地に依るが故なりて、〈云何が智地に依ると知る〉といわば、上来に説く所は皆な智地に依り、後に復た説く所も亦た智地に依り、第四偈に「智をば起こすもの、仏の境界なり」と言う（が故）なり。「微けき」とは云何が微けき。「といわば、」偈に「知り難き聖の道は」と言う（が故）なりて、〈云何が知り難き〉といわば、謂わく、説く時に知り難きなりて、復た、〈云何が知り難き〉といわば、大聖の道知り難きなりて、大聖とは所謂る諸仏なれば、是の故に「微けき」と言うなり。「道」とは是れ因なりて、此の道を修行し能く聖の処に到るが故に、「知り難き聖の道は」と言うなり。此の「微けき」ことにも二種ありて、一には説く時に甚だ「微けき」こと、二には証する時に甚だ「微けき」ことなりて、是の次第の如し。何の故にか復た知り難き。「といわば、」偈に、「分別非ず、念を離れ」と言う（が故）なり。「分別非ず」とは、分別の境界を離れたるが故なり。「念を離れ」とは、自体として念無きが故なり。是の如き聖の道を名づけて甚だ「微けき」ものと為すは、何の故なる。「といわば、」甚だ「得難」ければなりて、「得難し」とは、證し難き（が故）なり。是れを甚だ「微けき」ものと名づく。（『新国訳大蔵経 十地経論I』一二〇頁）

とあり、「聖」とは諸仏のことを指し、「道」とは成仏の因であることが分かる。桑原氏は、この箇所について「聖道」の語が出された箇所として指摘すると同時に、道綽が『安樂集』にて示す二由の内、「理深解微」の理由と関係しているのではないかと指摘する。（7）そのように考えると、『十地経論』は道綽の聖道に対する難証性を語

る上で積極的な根拠となったといえる。

ところで、『安樂集』での『十地経論』の明確な引用は、第七大門此彼修道に『十地経』とともになされていることから、道綽が『十地経』および『十地経論』とつながりがあった事実が読み取れる。一方で、その引用は『安樂集』全体で、第七大門此彼修道の一か所のみであり、聖浄二門との関連は明らかではないという見方もありうるかもしれない。(8) しかし、より詳細に見てみれば、『十地経論』引用の直後に同論の文と関連する形で『涅槃経』、『論註』を引用しているため、道綽が『十地経論』の文意を『涅槃経』と『論註』を用いて解説していることを確認できる。これは、『十地経論』を道綽が元来講究していた『涅槃経』と浄土教に帰入する上で多大な影響を受けた『論註』に根拠を求めるものであり、「聖道」と「往生浄土」、それぞれを提示する『十地経論』と『論註』のつながりをうかがい知れる箇所であると考ええる。

第二節 『往生論註』にみられる「往生浄土」

曇鸞浄土教の流れを汲む道綽にとって、『論註』から「往生浄土」の語が見出されることは当然であるともいえる。糸原氏が指摘する「往生浄土」の語は次の箇所に見られる。

これを菩薩摩訶薩、五種の法門に随順し、所作意に随ひて自在に成就すと名づく。向の所説のごとき身業、口業、意業、智業、方便智業は、法門に随順するがゆゑなり。「意に随ひて自在に」とは、この五種の功德力をもつて、よく清浄仏土に生ずれば出沒自在なるをいふなり。「身業」とは礼拝なり。「口業」とは讚嘆なり。

「意業」とは作願なり。「智業」とは観察なり。「方便智業」とは回向なり。この五種の業和合すれば、すなはちこれ往生浄土の法門に随順して自在の業成就するをいふなり。（『註釈版七祖篇』一五〇頁）

条原氏の指摘する「随順往生浄土法門」という語がみられ、『論註』全体を通して、「往生浄土」の語を確認できるのは、この一か所のみである。この文から、身業、口業、意業、智業、方便智業の五種の功德力を、それぞれ礼拝、讚嘆、作願、観察、回向の五種の業と示し、それらを和合し修めることで、自在の業を成就することができ、それこそが往生浄土の法門を歩むことであると読み取れる。このことから、曇鸞は法門として往生浄土を位置づけていることが分かり、「往生浄土」を仏道として、成立するものと捉えていると考えられる。前掲の「これを菩薩摩訶薩、五種の法門に随順し、所作意に随ひて自在に成就すと名づく。向の所説のごとき身業、口業、意業、智業、方便智業は、法門に随順するがゆゑなり。」は世親『浄土論』長行（『註釈版七祖篇』四一頁）に示される一節である。その説を受けて曇鸞は身業、口業、意業、智業、方便智業を礼拝、讚嘆、作願、観察、回向と示し、五種の法門を往生浄土の法門とし、「往生浄土」を強調しているようにも思える。このようなことから、彼土不退の仏道として、さらに世親『浄土論』に示される文意を根拠に、菩薩道として成立するという位置づけで「往生浄土」を語っていることが考えられる。

これらのことから、往生浄土の法門は、『浄土論』に示される五種の法門を言い換えたものとして、菩薩が修める行業と内容を同じくする意図があると考えられる。曇鸞は、「随順往生浄土法門」を菩薩道そのものであるとすることで、往生浄土の法門を確立しようとしたのではないかと考える。

第二章 道綽の「聖道」と「往生浄土」

第一節 「聖道」の定義

道綽は、『安楽集』にて聖道・往生浄土の二門を立て、往生浄土の法門のみが通入できる道であることを明かす。この章では、主に『安楽集』の文を注視しながら、道綽が「聖道」と「往生浄土」をどのような仏道であると述べているのかについて論じることとする。

『安楽集』には、

大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。（『註釈版七祖篇』二四一頁）

と、大乘の二種の勝法として「聖道」、「往生浄土」を掲げている。

『安楽集』において「聖道」の語は、先述の第三大門聖浄二門と第二大門、二回のみとなっており、明確に聖道の定義に言及している箇所は見当たらない。そのため、この二か所を手掛かりとして、他の部分との関連も視野に入れての検討を要する。

まず、第二大門で示される「聖道」は、兜率天への願生と浄土に帰することを勧めることとの比較において言及される。その中で、兜率天に往生した後のこととして、

兜率天上には水・鳥・樹林和鳴哀雅なることありといへども、ただ諸天の生樂のために縁たり。五欲に順ひて聖道を資けず。もし弥陀浄国に向かはば、一たび生ずることを得るものはことごとくこれ阿毘跋致なり。

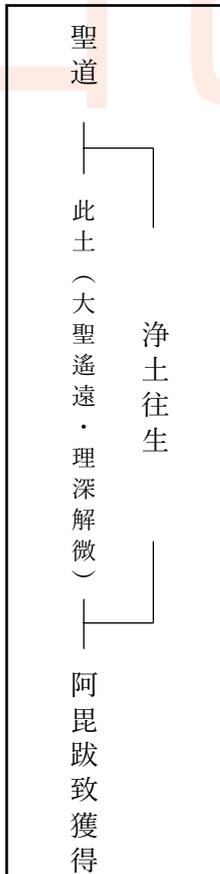
(『註釈版七祖篇』二一六頁)

と示している。ここでの「聖道」の使用は、兜率天への往生が「聖道」にどのような効果をもたらすのか、というところに論点が置かれており、「往生浄土」に対する法門としての「聖道」とは考えにくい。しかし、兜率往生は五欲によって聖道をさまたげるとするのに対し、阿弥陀仏の浄土に生じることができれば阿毘跋致を得るとすることから、聖道とは阿毘跋致を得るための道であり、阿弥陀仏の浄土はこのような聖道をさまたげないという見方もできる。このことを踏まえると、図1のようになる。つまり、往生浄土こそ聖道に向かわせる道であるともいえる。さらに、「聖道」は「往生浄土」と必ずしも相反する方向性ではなく、阿毘跋致を目指す聖道の中の、一方法としての浄土往生とも考えられ、図2のようにも捉えることができる。

図1



図2



次に、第二大門聖浄二門には、

大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月蔵経』にのたまわく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。当今は末法にして、現にこれ五濁悪世なり。（『註釈版七祖篇』二四一頁）

とあり、「聖道」の語が確認できる。ここでは明確に「往生浄土」に対する「聖道」として述べられている。そして、聖道の難証性を大聖遙遠、理深解微の二由で示し、その根拠を『大集月蔵経』に求めている。しかし、定義については第二大門同様に言及されておらず、結局聖道とはどのような仏道であるのかは疑問に残る。

一方で、第三大門難易二道には、

余すでにみづから火界に居して、実に想ふに怖れを懐けり。仰ぎておもんみれば、大聖三車をもつて招慰し、しばらく羊鹿の運は権の息にしていまだ達せず。仏、邪執は上求菩提を障ふと訶したまふ。たとひ後に回向するも、なほ迂回と名づく。もしただちに大車に挙るも、またこれ一途なり。ただおそらくは現に退位に居して嶮径はるかに長きことを。自徳いまだ立たず。昇進すべきこと難し。（『註釈版七祖篇』二三三頁）

と示されており、道綽が生きている世界は火界であること、そしてその世界に生きる道綽自らの体験として、得証が難しいことなど、道綽の現状が語られる。そして、「へ難行道」といふは、いはく、五濁の世、無仏の時にあ

りて阿毘跋致を求むるを難となす。」(『註釈版七祖篇』二三三頁)と論じ、難易二道を『論註』より引用している。これらの文から、聖道が難証である理由、二由の「大聖遙遠」・「理深解微」は難行道にて示す「無仏の時」・「五濁の世」と類似していることが分かる。そして、二由の根拠である『大集月蔵経』文意と道綽自らが置かれている現状が類似する。

他にも、聖道の内実をうかがい知る上でのがかりとして、第一大門には、

またもし聖(釈尊)を去ること近ければ、すなはち前のもの定を修し慧を修するはこれその正学なり、後のものはこれ兼なり。もし聖を去ることすでに遠ければ、すなはち後のもの名を称するはこれ正にして、前のものはこれ兼なり。なんの意ぞしかるとならば、まことに衆生、聖を去ること遙遠にして、機解浮浅暗鈍なるによるがゆゑなり。(『註釈版七祖篇』一八四頁)

とあり、条原氏はこれを前後兼正論として、従来の仏教で課題とされてきた定慧止観の行法と、称名念仏の対決を宣言する重大な意味を持つと論じている。()前後兼正の根拠として、釈尊が去って長い時が経過していること、そして衆生の能力が劣っていることが述べられており、これらは「聖道」が難証である理由の二由「大聖遙遠」・「理深解微」と一致する。つまり、聖道とは定と慧を修する仏道であり、三学を正学とする仏道であるといふことができる。

以上の考察から、『安楽集』での「聖道」は、三学を修め、阿毘跋致を得るための道であり、「往生浄土」と必ずしも相反する仏道ではないといえる。さらに、難行道が難である理由と聖道が難である理由が一致することか

ら、聖道と難行道は同じ仏道であるということが出来る。

第二節 「往生浄土」の定義

続いて、「往生浄土」の定義について論述する。

『安樂集』には、第一節冒頭に引用した第三大門聖浄二門に続いて、『無量寿経』の文を引用しているが、そこに『観無量寿経』の文の一部取り入れ、独自の解釈で『無量寿経』の経説を引用している。(10)「もし衆生ありて、たとひ一生悪を造れども、命終の時に臨みて、十念相續してわが名字を称せんに、もし生ぜずは正覚を取らじ」(『註釈版七祖篇』二四二頁)とあり、一生悪を造るとしても臨終時に十念相續して、阿弥陀仏の名を称すれば往生できると解釈している。『無量寿経』に説かれる第十八願には、「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜん」と欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。」(『註釈版』一八頁)とあり、「命終」という語は見当たらないが、『観無量寿経』には、

下品下生といふは、あるいは衆生ありて不善業たる五逆・十悪を作り、もろもろの不善を具せん。かくのごときの愚人、悪業をもつてのゆゑに悪道に墮し、多劫を経歴して苦を受くること窮まりなかるべし。かくのごときの愚人、命終らんとするときに臨みて、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教へて念仏せしむるに遇はん。(『註釈版』一一五頁)

とあり、下品下生は命終にあつて念仏を称えるとされている。このことから、道綽が『大経』として引用した文

は『無量寿経』と『観無量寿経』の文意を組み合わせたものとみることができ、道綽にとって『大経』すなわち『無量寿経』とは、『観無量寿経』と教説が互いに矛盾するものではなく、一体のものとして理解していると考えられる。さらに、「たとひ一形悪を造れども、ただよく意を繋けて専精につねによく念仏すれば、一切の諸障自然に消除して、さだめて往生を得。なんぞ思量せずしてすべて去く心なきや。」（『註釈版七祖篇』二四二頁）の一文からも、下品下生のように一生悪を造ったとしても念仏をすれば、往生浄土が可能となることを示唆しており、常に念仏する重要性を示している。

『安楽集』における「往生浄土」の語の使用は、前掲の第三大門聖浄二門のみである。第三大門聖浄二門には、「当今は末法にして、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて、通入すべき路なり。」（『註釈版七祖篇』二四一頁）と示し、続いて先述の『無量寿経』と『観無量寿経』の文意を重ねた文を示すのである。既に考察した通り、『無量寿経』の第十八願と『観無量寿経』の下品下生の文意を組み合わせた文を、『大経』として述べており、末法においては浄土の一門のみが、通入できる道であることの根拠としている。そして、下品下生に特徴的である、一生悪をつくるという語を第十八願に見出している。このことから、「往生浄土」の法門とは、一生悪をつくる下品下生が、阿弥陀仏の第十八願を中心とする誓願によって、常に念仏をこころがけることで、浄土往生が可能となる法門であるといえる。さらに、易行道については同じく第三大門で言及するが、

（易行道）といふは、いはく、信仏の因縁をもつて浄土に生ぜんと願じて、心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば、仏願力のゆゑに即便往生す。仏力住持するをもつてすなはち大乘正定の聚に入る。（『註釈

版七祖篇』二三四頁)

(中略)

ゆゑに『大経』にのたまはく、「十方の人天、わが国に生ぜんと欲するものはみな阿弥陀如来の大願業力をもつて増上縁となさざるはなし。」と。もしかくのごとくならずは、四十八願すなはちこれ徒設ならん。後学のものに語る。すでに他力の乗すべきあり。みづからおのが分を局り、いたづらに火宅にあることを得ざれ。

(『註釈版七祖篇』二三五頁)

と、『大経』の文を引き易行道を勧めている。ここでの易行道は後学のもの、すなわち末法に生きる衆生が、阿弥陀仏の四十八願成就によつてもたらされる業力を得て、浄土に往生し大乘正定の聚に入る仏道であると考えられる。「往生浄土」の法門における阿弥陀仏の第十八願を中心とする誓願と下品下生が、それぞれ易行道における四十八願成就による業力、「後学のもの」である末法の衆生と対応すると考えられる。つまり、『安楽集』において「往生浄土」の法門は易行道と同義であると言えるのではないかと考える。

第三章 「自力」と「他力」

第一節 曇鸞の「自力」と「他力」

道綽の自力観と他力観を論じる前に、それらの土台となった曇鸞の自力・他力観を論じることとする。曇鸞と

れる。さらに、先述の三願的証での一文に、

おほよそこれかの浄土に生ずると、およびかの菩薩・人・天の所起の諸行とは、みな阿弥陀如来の本願力によるがゆゑなり。なにをもつてこれをいふとなれば、もし仏力にあらざれば、四十八願すなはちこれ徒設ならん。いま的らかに三願を取りて、もつて義の意を証せん。(『註釈版七祖篇』一五五頁)

(中略)

仏願力によるがゆゑに、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。常倫諸地の行を超出するをもつてのゆゑに、ゆゑに速やかなることを得る三の証なり。これをもつて推するに、他力を増上縁となす。(『註

釈版七祖篇』一五七頁)

と示し、三願を受けて他力を増上縁と規定している。同じく、三願的証での言及として、「阿弥陀如来を増上縁となす。」(『註釈版七祖篇』一五五頁)としており、「他力」と「阿弥陀如来」を、同じく増上縁と示し、阿弥陀如来の本願力が仏力と同義であることを確認できる。

このことから、他力とは増上縁であり、阿弥陀如来の本願力に他ならない、と見ることが可能である。そして、易行道は仏力すなわち他力によって、往生を得ることができ、阿毘跋致である大乘正定の聚に入る仏道であると読み取れる。つまり、曇鸞の中での易行道は、他力のみで成立する仏道であるといえる。

以上の考察から、『論註』での難行道とは、阿弥陀仏の本願力すなわち他力がないために難であり、易行道は、自力ではなく、他力のみで阿毘跋致を得るといえる。つまり、自力は難行道を修めるための行である一方、他力

は易行道を歩むための行であると考えられる。

第二節 道綽の「自力」と「他力」

第一項 『安樂集』における「自力」と「他力」

道綽の自力・他力観については、難易二道を語る箇所に見ることができ、道綽の難易二道の引用は、『論註』からのものであるため、原則曇鸞と同義である。難行道には曇鸞と同じく、難行道が難である理由として、五つの理由を示す。そして、五つ目の理由として「ただ自力のみありて他力の持つなし。」（『註釈版七祖篇』二二三頁）として、自力と他力に言及している。そして、同じく難易二道に、「何者か自力。たとへば人ありて生死を怖畏して、発心出家して定を修し、通を発して四天下に遊ぶがごときを名づけて自力となす。」（『註釈版七祖篇』二三四頁）とあり、さらに「ここにありて心を起し行を立て浄土に生ぜん願ずるは、これはこれ自力なり。命終の時臨みて、阿弥陀如来光台迎接して、つひに往生を得るをすなはち他力となす。」（『註釈版七祖篇』二三四頁）と述べ、自力と他力を定義している。浄土への往生を語る場面で自力の必要性を論じており、曇鸞との違いがある。曇鸞と道綽の自力観の相違については、杉山裕俊氏や宮井里佳氏が論じている。杉山氏は易行道における自力の含有について以下のように述べている。

道綽は易行道を単に他力他撰の法門と規定しているわけではなく、そこには自力と他力の両面があることを明かしている。すなわち、『安樂集』における易行道とは、現生で菩提心を発し、往生浄土を願いながら仏道

修行を実践すること（自力）と、臨終時に阿弥陀仏の来迎（他力）によって浄土へ往生するという二つの過程を経て成立するものであり、道綽は自力・他力を対概念としてではなく、一つの連続した関係にあるものと捉えている。なかでも、阿弥陀仏の来迎をもって他力の具体相とする点は、曇鸞とは異なった道綽独自の表現であるといえる。（11）

と述べており、道綽の易行道における自力の使用は単に他力の対概念ではなく、易行道においては自力から他力への連続性があると指摘している。さらに、宮井氏も杉山氏同様に、易行道と自力の関係について指摘している。

（12）道綽は易行道について、龍樹『十住毘婆沙論』『易行品』の一文として、曇鸞『論註』に述べられる難易二道を引用している。「易行道」といふは、いはく、信仏の因縁をもつて浄土に生ぜん願じて、心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば、仏願力のゆゑに即便往生す。」（『註釈版七祖篇』二三四頁）と示している。これは自力を定義した道綽の文言に非常によく似ている。そして、「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」の文は『論註』には見られず、宮井氏はこの一文に注目し、既に古くから議論が行われていると指摘する。そして、道綽の易行には「自力」行が含まれる可能性を指摘し、自力から他力への実践の連続性を論じている。（13）

古くからの議論について宮井氏は、山本佛骨氏が端的に整理しているとする。山本氏によると、

而して五濁無仏と無濁有仏の穢土と浄土、自力修行と願力得生の、本質的な問題の継承は、第三大門の難易二道の下所の論に明かである。尚茲で易行道の下に「起心立德修諸行業」と云い『論註』に無かつた文字が挿入されて居る事に就いて、先哲に種々の解釈が行われて居る。或は文の錯簡ではあるまいかと推測した説

もあるが、異本の校異を見るに、別なものを見ないから、現在のところ錯簡説も当を得たものではない。本派学系では敬恩の『唯浄記』五に真仮両意を含むとし、高倉学系では、慧然の『勸信義』慧琳の『日纂』秀存の『癸丑記』に要弘奄含の釈と見て居る。更に知空の『鑰門』僧樸の『講録』僧鎔の『里鼓』鮮妙の『要解』等に何れも「信仏因縁願生浄土」の註であつて『易行品』の「人能念是仏、無量力功德」と云うものと同意であり一念仏中の五然（「念」か。原文ママ）門の徳を含ましめたのだと云っている。自分は大体後説に随いたいと思うが、これは道綽の行業論と相俟つて更に明かにせねばならない問題であるから、詳しくは後の行業論に至つて更に論究する筈である。（¹⁴）

とある。この山本氏の論述を受けて、どのような議論がなされてきたのかを整理する。まず、本願寺派では敬恩の『唯浄記』五から真仮両意があるとされ（¹⁵）、高倉つまり大谷派では、慧然の『勸信義』（¹⁶）、慧琳の『日纂』（¹⁷）、秀存の『癸丑記』（¹⁸）に要弘奄含とされていたと指摘する。

ここからは、この真仮両意と要弘奄含という語について、調査していくこととする。まず、真仮とは、「真と仮、真実と方便。「真仮対」（「行」は念仏と諸善との比較。「念仏成仏これ真宗 万善諸行これ仮門権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ」（「浄讃」）（¹⁹）とある。このことから、真仮両意とは、真実と方便の両方の意味に捉えることができるというものであると考えられる。つまり、「起心立德修諸行業」の語について、本願寺派では、真実と方便との区別が曖昧であり、理解しにくい箇所とされてきたといえる。

次に、要弘奄含について調査する。要弘とは、しばしば一對のものとして語られている、要門と弘願のことを

指すと考える。要門とは、「要門は観經の定散二門で弘願に入る肝要の法門、弘願は大經の念仏往生の願を指す。」(20)とあり、弘願とは、「広弘の誓願。三世を貫き十方にあまねく衆生を救う本願。」(21)とある。このことから、弘願に向かわせるものが、要門であると考えられ、真仮両意と同じような意味として捉えることができる。大谷派でも本願寺派同様な見解がなされてきたといえる。

さまざまな指摘がある中で、この「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」の文は錯簡によるものではなく、宮井氏や山本氏の指摘から、既に江戸宗学の時から問題視されていたことは確かであるといえる。江戸宗学において、本願寺派や大谷派で以上のような見解がある背景には、自力と他力の両立を否定する傾向にある宗学にとって、易行道に示される、「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」の一文に、やはり自力的な要素が含まれると考えられたためであろう。

ここまでの考察から、『安樂集』における難行道は『論註』同様、自力のみの仏道であると考えられる。一方で、易行道には、「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」の一文があり、それを「心を起し行を立て浄土に生ぜんと願ずるは、これはこれ自力なり。」と規定する以上、他力のみならず自力も含まれると考えられ、杉山氏や宮井氏も指摘する自力から他力への連続性があるものと考えられる。つまり、道綽にとっての易行道とは他力のみで成立するものではなく、自力と他力を含むものとして理解することができる。

第二項 自力自摂と他力他摂

これまでに、杉山氏や宮井氏が指摘するように、道綽のいう易行道には自力行が含まれ、自力から他力への連続した関係があることを論述した。一方で山本氏は、

道綽の教学は、聖浄二門を分判して浄土教を獨立せしめた所に最も深い特色と意義がある。即ち五濁痛焼の衆生が救われる道として深く注意せられたものは、難易二道の教判であるが、之れを『大経』に於ける經の住滅前後の問題と照し合せ、浄土易行の道こそ三時通入の法である事を認知されて、餘他の諸々の此土入聖の法と対決せられ、浄土における別途因果の道を樹立されて行つたのである。然もそれは自力自攝の法門と、他力他攝の法門との分界を明確に區別する事が目的であつて、従来も浄土往生を勧めた人は少なくなかつたが、それはただ聖道成佛の爲の方便として浄土願生を勧めたものに過ぎなかつた。(22)

と述べており、道綽の難易二道の引用は、難行道を自力自攝とし、易行道を他力他攝として分界を明確にするこゝとが目的であつたとしている。この項では、杉山氏や宮井氏と、山本氏との間で見解が大きく異なる点に注目し、山本氏の指摘を検討していくこととする。

さて、難易二道を自力自攝、他力他攝と、區別を明確にしたという山本氏の指摘であるが、確かに『安樂集』には、『論註』から引用した易行道の説明として、「仏願力のゆゑに即便往生す。仏力住持するをもつてすなはち大乘正定の聚に入る。」(『註釈版七祖篇』二三四頁)と述べており、易行道は他力によって往生を得る道であり、他力によって大乘正定聚に入ることを示している。しかし、この後に、

問ひていはく、菩提はこれ一なり。修因また不二なるべし。なんがゆゑぞ、ここにありて因を修して仏果に

向かふを名づけて難行となし、浄土に往生して大菩提を期するをすなはち易行道と名づくるや。答へてはいはく、もろもろの大乗経に弁ずるところの一切の行法に、みな自力・他力、自摂・他摂あり。〔註釈版七祖篇〕
二三四頁)

とあり、問答を置き、菩提は一つであり、また修めるべき因も二つとなることはないが、なぜ難行と易行の二つの道があるのかという問いを立てる。その後、すべての大乘諸法には自力・他力、自摂・他摂の法義があることを明かす。傍線部の箇所は、『略論安楽浄土義』からの引用であると考えられ、(23) 問いの答えを他の文献の内容を用いて根拠付けており、強調しているようにも考えられる。さらに、第三大門聖浄二門には、「大乘の聖教によるに」(『註釈版七祖篇』二四一頁)とあることから、聖道と往生浄土、自力他力・自摂他摂それぞれに関連性が考えられる。このことから、大乘経が示す行法には自力・他力、自摂・他摂の両面があると読み取ることが自然であり、易行道にもまたその両面があると考えられ、山本氏の自力自摂と他力他摂を明確に区別することが目的という指摘には疑問が残る。この点については、杉山氏も自力・他力、自摂・他摂という語に関して、「諸の大乗経典に説かれるすべての行法には自力と他力、自摂と他摂という二つの側面がある」(24)と分析し、大乘諸法には自力と他力の両面があるとしている。

一方で、同じく傍線部の箇所について野村淳爾氏は、「すべての行法は自力自摂の法門と他力他摂の法門に分けることができると言及している。つまり、この答えをもって、浄土へ往生する方法としての易行道が他力の法門であると読み取ることができる。」(25)と論じている。杉山氏と野村氏の論は互いに異なるものとなっており、

傍線部にみられる、道綽のいう自力・他力、自摂・他摂とは、大乘経に示される行法のうちには自力・他力の両面があるということなのか、すべての行法は、自力か他力どちらか一方で成立するものであるのかという点で、見解が分かれているものである。両者の相違は、『安樂集』における自力と他力の語の使用に係る見解に、差異が生じていることが根底にあると考えられるが、結局、この見解の相違は易行道に自力が含まれるか含まれないか、という点に行き着くものである。このことから、杉山氏と野村氏の中で、易行道での自力と他力の語の使用について、それぞれの見解を検討していくこととする。

まず、野村氏は他力の語について、

阿弥陀仏のはたらきとして、具体的に臨終の来迎であると明示している。これは道綽の特徴的な表現である。

つまり、曇鸞とは明確に異なった他力義の展開がみられ、他力を阿弥陀仏の臨終来迎という有相をもって捉

えるのである。(26)

と論じている。他力とは、臨終来迎という具体相であり、このような他力義は曇鸞と異なる表現であるとする野村氏の指摘に対しては、杉山氏も同様に捉えており、(27)『安樂集』での道綽独自の他力の使用は、有相であるという点は、両者ともに一致している。ただ、注目すべき点は、野村氏が他力を臨終来迎という有相として捉える理由について、

道綽の時代は往生思想が執着そのものという考えや無相空理の視点から浄土願生を否定する思想が非常に大きな勢力となっており、浄土という有相を取ること自体が執着と同様と考える風潮が強かった。つまり、浄

土が大乘仏教の空・無相の基盤から離れていると批判されていたのである。しかし、この問題に対して、道綽は他力を阿弥陀仏の来迎という具体相で示し、西方浄土の問答と結びつけることにより、西方浄土の教えの大乘としての正当性を示しているのである。(28)

と論じている点である。道綽在世時に盛んであった往生思想への論難に対して、有相の他力とすることで、大乘としての正当性、すなわち空・無相の基盤に立脚していることを示している、と野村氏は論じている。一方で、杉山氏は、別段他力を大乘の正当性であるとは言及していないが、(29)易行道において自力から他力への連続した関係として、他力を来迎という具体相と捉える点は野村氏同様である。

易行道における自力の語については、野村氏は易行道を他力の法門として自力を否定しているが、杉山氏は易行道における仏道修行としての正当性であるとする。仏道修行としての正当性とは、杉山氏によると、易行道における行法は専ら念仏三昧であり、それこそが自力であり、道綽が『観仏三昧海経』をはじめとする、諸経を用いて念仏三昧を論じている点をもって、大乘諸経論に基づく往生行であり、釈尊が説き勧めたという正当性であると論じている。(30)杉山氏は、易行道に示される自力を念仏三昧と捉え、釈尊が勧めた行のために易行道が成立すると論じているのである。筆者は杉山氏と同様に、易行道で示される自力が、釈尊が説き勧めることによる往生行としての正当性であると考えるが、念仏三昧とする点には疑問を持つ。(31)道綽のいう念仏とは、第二章第二節でも述べた通り、第三大門聖浄二門の後に示される、浄土の一門のみが通入できる根拠となっている『無量寿経』と『観無量寿経』の文意を受けた称名念仏であると考える。

先述の通り、『安樂集』では、『論註』で示されなかった「心を起し徳を立て、もろもろの行業を修すれば」の一文をあえて挿入しており、後の自力を定義する箇所において同様の説明をすることから、自力との関連は明らかであり、易行道での自力の含有については、肯定的に捉えるのが当然であると考ええる。このことから、すべての大乗経には、自力と他力の両面が含まれると考えるのが順当に思われる。

ただ付言すべきは、このような考察によるのであれば、必然的に難行道においても自力のみではなく、他力も含まれる可能性をも考察されなければならない。難行道については、『論註』同様に「ただ自力のみありて他力の持つなし。」（『註釈版七祖篇』二三三頁）と示し、他力の含有を否定している。ただ、先述のように難行道が聖道そのものと考えられるため、第二章第一節で述べた兜率往生と浄土往生との比較から、聖道に往生浄土が含まれる可能性がある以上、難行道にもまた往生浄土の法門が含まれ得るのであり、他力的な要素も含まれ得るとも考えられるのである。さらに、修因には一見すると難易の二つがあるように思えるが、難行・易行と自力・他力は一対の関係にあるのではなく、密接に絡み合い成立しているものであり、難行と易行それぞれに、自力と他力が含まれる可能性があるといえる。

以上の考察から、一見すると自力のみで成立している難行道であるが、大乗諸法の一つである以上は自力と他力の両面があるといえる。また、易行道は『安樂集』にて、明確に自力の含有が示されていると考えられ、難行道同様自力と他力が構成要素となっていると考える。このことから、杉山氏の指摘するように、自力・他力、自摂・他摂とは、大乗経に示される行法が、自力か他力どちらか一方で成立することではなく、行法には自力・他

力の両面があることを示すものと考ええる。

結論

第一章では、『十地経論』及び『論註』を用いて、「聖道」と「往生浄土」それぞれの語を確認した。『十地経論』と「聖道」の関係においては、「微けき」と「理深解微」の関連が考えられることを論述した。『論註』と「往生浄土」の関係については、曇鸞が菩薩道として示す「随順往生浄土法門」を道綽が継承した可能性に言及した。

第二章では、「聖道」と「往生浄土」の具体的な行道について考察した。「聖道」は、三学を修め、阿毘跋致を得るための道であること、「往生浄土」と必ずしも相反する仏道ではないこと、そして難行道が難である理由と聖道が難である理由が一致することから、聖道と難行道は同じ仏道であると論じた。「往生浄土」は、一生悪を造る衆生が、十念相続の称名念仏によって浄土往生を目指す仏道である。「往生浄土」の法門で語られる「第十八願を中心とする誓願」と「下品下生」が易行道で示される「四十八願成就による業力」と「後学のもの」にそれぞれ対応することから、「往生浄土」の法門は易行道と同義である。

第三章では、曇鸞の自力他力観、道綽の自力他力観と道綽の易行道に特徴的な自力の表現について論じた。曇鸞の自力他力観では、自力は難行道を修めるための行である一方、他力は本願力で増上縁であり、易行道を歩む

ための行である。道綽の自力他力観は、曇鸞の自力他力義を受け継ぎながらも、易行道における自力の含有を示していた。曇鸞が難行道と易行道を、それぞれ自力と他力として明確に分別したことに對して、道綽は『略論安樂淨土義』の文を用いて、大乘諸法に自力と他力の両面があると示すのである。

道綽は自力修行の挫折により、自力の限界性や時機の観点から難行道による得証ではなく、易行道による実践を勧めた。易行道による実践とは「往生淨土」の法門に他ならず、必ずしも「聖道」と並立する関係にあるのではなく、得証の可能性を「往生淨土」の法門のみに見出し、その法門を勧めるための「聖道」の提示であった。さらに、第二章第一節から、聖道の中に往生淨土の法門を見出すことで、往生淨土の法門が菩薩道として成立することを論じたのである。これは、大乘諸法に示される自力・他力、自摂・他摂の両面によって、論証したものであり、自力の限界性を認知しながらも、大乘の正当性である自力を易行道の中に見出したのである。そして、易行道を大乘諸法に位置付けることによって、阿毘跋致獲得の仏道としての成立に努めたと考えられる。易行道とは、理深解微なる聖道と方向性を異にしない往生淨土の法門であり、唯一得証の可能性を持つとする姿勢は、末法において約時被機の教えを求めた道綽の求道精神が示されているといえよう。

以上の考察から、道綽は独自の自力・他力の語の定義を示し、「往生淨土」の法門は自力による発菩提心とそれに基づく念仏、願生が含まれると捉えることができ、他力のみで成立する法門ではなく、自力と他力の両面を含む法門であるといえる。

- 1 「聖道」の典拠については、木村宣彰氏が『涅槃経』にあることを指摘（『安楽集講要』東本願寺出版、二〇一八）しており、糸原氏自身も「聖浄二門判と称名」（『印度学佛教学研究』三〇―二、一九八二）において『涅槃経』との関連も加味して考察されるべきと論じている。
- 2 糸原恒久「聖浄二門判と称名」（『印度学佛教学研究』三〇―二、一九八二、二九九頁）。
- 3 杉山裕俊「『安楽集』の研究」（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五六頁）。
- 4 木村宣彰『安楽集講要』（東本願寺出版、二〇一八、二一六頁）。
- 5 木村宣彰『安楽集講要』（東本願寺出版、二〇一八、二一五頁）。
- 6 木村氏のような訓読があるが、「仏性も亦爾なり。一切衆生に復之有りと雖も、必ず無漏聖道を修習するを須ひて、然して後に見るを得るなり。」（国訳一切経印度撰述部涅槃部二、常盤大定訳、大東出版社、一九三五、五七〇頁）の訓読が順当に思われる。
- 7 糸原恒久「聖浄二門判への一考察」（『仏教論叢』二五、一九八一、二八頁）。
- 8 糸原恒久「聖浄二門判への一考察」（『仏教論叢』二五、一九八一、二八頁）。
- 9 糸原恒久「聖浄二門判と称名」（『印度学佛教学研究』三〇―二、一九八二、二九九頁）。
- 10 『註釈版七祖篇』二四一頁脚註より。
- 11 杉山裕俊「『安楽集』の研究」（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五六頁）。
- 12 宮井里佳「道綽『安楽集』第三大門第一に関する覚書―「起心立德 修諸行業」という「自力」―」（埼玉工業大学先端科学研究所アニュアルレポート二〇、二〇二二）。
- 13 宮井里佳「道綽『安楽集』第三大門第一に関する覚書―「起心立德 修諸行業」という「自力」―」（埼玉工業大学先端科学研究所アニュアルレポート二〇、二〇二二、二〇頁）。

- 1 4 山本佛骨『道綽教学の研究』（永田文昌堂、一九五九、二七〇頁）。
- 1 5 龍谷大学写字台文庫蔵（請求番号 122.5-38-W-12）。龍谷大学図書館貴重資料画像データベースにて閲覧。
- 1 6 妻木直良編『真宗全書 第十二卷』（国書刊行会、一九一三、一頁）。
- 1 7 妻木直良編『真宗全書 第十二卷』（国書刊行会、一九一三、三五頁）。
- 1 8 眞宗典籍刊行会編『眞宗体系 第八卷』（眞宗典籍刊行会、一九一八、九五頁）。
- 1 9 眞宗新辞典編纂会『眞宗新辞典』（法蔵館、一九八三、二九六頁）。
- 2 0 眞宗新辞典編纂会『眞宗新辞典』（法蔵館、一九八三、五〇〇頁）。
- 2 1 眞宗新辞典編纂会『眞宗新辞典』（法蔵館、一九八三、一一八頁）。
- 2 2 山本佛骨『道綽教学の研究』（永田文昌堂、一九五九、四五〇頁）。
- 2 3 杉山裕俊『安楽集』の研究（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五五頁）。
- 2 4 杉山裕俊『安楽集』の研究（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五五頁）。
- 2 5 野村淳爾『安楽集』における他力の一考察（『印度学仏教学研究』五八一―二〇〇九、二一三頁）。
- 2 6 野村淳爾『安楽集』における他力の一考察（『印度学仏教学研究』五八一―二〇〇九、二一四頁）。
- 2 7 杉山裕俊『安楽集』の研究（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五六頁）。
- 2 8 野村淳爾『安楽集』における他力の一考察（『印度学仏教学研究』五八一―二〇〇九、二一四頁、二一五頁）。
- 2 9 杉山裕俊『安楽集』の研究（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五六頁）。
- 3 0 杉山裕俊『安楽集』の研究（平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五、五七頁）。
- 3 1 杉山氏も道綽の称名念仏に言及しているが、称名念仏は念仏三昧の一相状であり、念仏三昧には礼拝行や観察行が含まれると指摘している。（前掲論文、六一頁）

参考文献
書籍

- ・妻木直良編『真宗全書 第十二卷』国書刊行会、一九一三年
- ・真宗典籍刊行会編『真宗体系 第八卷』真宗典籍刊行会、一九一八年
- ・常盤大定訳『国訳一切経印度撰述部涅槃部二』大東出版社、一九三五年
- ・山本佛骨『道綽教学の研究』永田文昌堂、一九五九年
- ・塚本善隆『唐中期の浄土教』法蔵館、一九七五年
- ・真宗新辞典編纂会『真宗新辞典』法蔵館、一九八三年
- ・早島鏡正・大谷光真『浄土論註』大蔵出版社、一九八七年
- ・浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典七祖篇 註釈版』本願寺出版社、一九九六年
- ・教学伝道研究センター『浄土真宗聖典 註釈版第二版』本願寺出版社、二〇〇四年
- ・大竹晋『新国訳大蔵経 十地経論I』大蔵出版、二〇〇五年
- ・木村宣彰『安楽集講要』東本願寺出版、二〇一八年

論文

- ・糸原恒久「聖浄二門判への一考察」(『仏教論叢』二五、一九八一年)
- ・糸原恒久「聖浄二門判と称名」(『印度学佛教学研究』三〇―二、一九八二年)
- ・野村淳爾「『安楽集』における他力の一考察」(『印度学仏教学研究』五八―一、二〇〇九年)
- ・杉山裕俊「『安楽集』の研究」(平成二十六年学位請求論文、大正大学、二〇一五年)
- ・宮井里佳「道綽『安楽集』第三大門第一に関する覚書―「起心立德 修諸行業」という「自力」―」(埼玉工業大学先端科学研究所アニュアルレポート二〇、二〇二二年)